



Title	「支援」研究のはじまりにあたって：生きづらさと障害の起源
Author(s)	藤野, 友紀
Citation	子ども発達臨床研究, 1, 45-51
Issue Date	2007-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/20558
Type	bulletin (article)
File Information	FUJINO.pdf



[Instructions for use](#)

「支援」研究のはじまりにあたって —— 生きづらさと障害の起源 ——

藤野友紀

Views on the study of supporting children The origins of difficulties, disabilities and handicaps

Yuki FUJINO

要 旨

本稿は「生きづらさ」や「障害」といったキーワードを手がかりとしながら、「支援」にまつわるいくつかの論点および研究の課題を整理した。「生きづらさ」「障害」とは誰にとってのどのような問題であり、どのように生成し変化するものなのか。それを問うことが「支援」を考えるにあたって重要である。「障害」や「生きづらさ」が社会的環境のシステム不全によって、すなわち他者を含む社会との関係性の中で生じるとすれば、社会的環境のシステムを改変することの中に「障害」の形成を阻止する可能性が含まれていることになるだろう。子ども支援研究部門の課題は、「障害」や「生きづらさ」を個人の問題として語ることの危うさを踏まえて、特定のカテゴリーに入れられた個人や集団に問題を帰属させるのではない「支援」モデルをつくっていくことに据えられる。

キーワード：支援、発達、障害、生きづらさ

1. はじめに

2006年4月に子ども発達臨床研究センターは「困難」を抱える子どもや家族の援助研究を中心的な研究課題に掲げて発足した。本センターは子ども臨床研究部門(第1部門)、子ども発達研究部門(第2部門)、子ども支援研究部門(第3部門)の三つの研究部門から構成されており、筆者が所属している子ども支援研究部門(第3部門)は支援のあり方に関する研究を課題としている。

さて一般的に「支援」はどのような意味を持つ言葉として捉えられているのだろうか。おそらくそこから素朴に連想されるのは、「困っている人あるいは助けを必要としている人を助ける」というこ

とであると思われる。しかし、一步踏み込んで考えてみるとすぐに、「支援」についてはいくつもの厄介な論点があることに気づかされる。それはたとえば、支援の目標は何か、支援するとは具体的にどのような内実を含むのか、支援にともなって助ける側と助けられる側に権力関係が生じる可能性はないのか等々である。

昨年12月に、「子どもたちの『生きづらさ』を考える」というテーマでセンター発足記念学内シンポジウムが開催された。このテーマ設定は、センターが今後「『困難』を抱える子どもや家族の援助研究」を遂行していくにあたって、どのようなパースペクティブから課題に接近していくのか自覚的に省察しておくことが必要であるという認識

に基づいてなされたと思われる。本稿はこのシンポジウムで筆者が行った話題提供の構成に若干の変更を加えたものである。なお執筆にあたっては当日の発表の本旨を補うために、「障害」について新たに項目を立てて考察を加えた。

2. 「生きづらさ」という言葉

近年になって「生きづらさ」や「生きにくさ」という言葉がマスメディアやアカデミズムの場で頻繁に語られるようになってきたように感じる。試みにインターネットの検索サイトで「生きづらさ」「生きにくさ」を入力してみると、ブログや掲示板も含めて実に8万件近くがヒットする状態である。今や「生きづらさ」「生きにくさ」は耳慣れた言葉の一つとして市民権を得ているのかもしれない。

では社会的実践や研究の場ではこれらの言葉はいつ頃からどのように用いられてきたのだろうか。雑誌記事索引で調べてみると、「生きづらさ」は1981年の日本精神神経学会総会において「主体的社会関係形成の障害と抑制」として語られたのが最初であり（加藤、1981）、「生きにくさ」はオウム真理教の地下鉄サリン事件を受けて1997年に『世界』（岩波書店）が現代社会に生きる若者の状況を読み解こうと特集「〈生きにくさ〉という問題」を組んだのが初出のようである。そして2000年以降現在に至るまで、「生きづらさ」「生きにくさ」という言葉をタイトルに掲げる論考は一挙に増え、それらの論考の領域も確実に広がってきたように思われる。たとえばアダルト・チルドレンと機能不全家族についてのもの（信田、2001）、精神障害をもつ人々についてのもの（日本障害者リハビリテーション学会、2002）、現代社会に生きる若者についてのもの（太田、2002；土井、2006）、同性愛者や夫婦別姓論者など「社会的少数派」とされる人々についてのもの（草柳、2004）、顔に外傷のある「ユニークフェイス」の人々についてのもの（松本、2000）、軽度発達障害をもつ人々についてのもの（田中、2005；京都ひきこもりと不登

校の家族会、2006）などが挙げられる。また、芥川賞を受賞した金原ひとみ氏が幼少時から現在までの歩みと創作に寄せる思いを語ったインタビュー「生きづらさを形に」も記憶に新しいところだろう（細貝、2004）。

さてこのように「生きづらさ」「生きにくさ」は今や多様な領域で語られる言葉となっているものの、それらが具体的に何を指しているのか、あるいは抽象的にどのような定義があてはまるのかという共通の見解めいたものはまだないように思われる。しかし、さまざまな文脈を背景に持ついくつかの論考を見てみると、そのいずれもが程度の差はあれ「生きづらさ」「生きにくさ」を「社会」や「環境」や「時代」との関係で捉えようとしていることに気づく。

実はこれは至極あたりまえのことなのかもしれない。生まれながらにして生きづらさを抱えた人がいるわけではなく、「生きづらさ」はある状況の中でそれとの関係で生じてくるものであろう。もちろん人間は他者意識および自己意識が発達していく過程で、孤独感や罪悪感さえも自覚するような複雑な意識を持つようになる。そういった意味では人間は苦しみや悲しみを本来的にもっており、それらは生きている証でもある。しかし、上で見てきたように、「生きづらさ」が特定の人たちに対してもちいられている言葉である限り、それは人間が本来的に持っている苦しみや悲しみではない何かを指していると考えるのが妥当であろう。それはやはり、ある状況の中でそれとの関係で生じてくるものであると考えられる。

3. 一次的障害と二次的障害

前項では「生きづらさ」「生きにくさ」という言葉の用いられ方についてごく簡単に検討を加え、それらが社会（もちろん他者を含む）や環境との関係の中で現れてくるものであろうことが推察された。ただ、先にも述べたようにこれらの言葉は昨今広く使われ始めているとはいえ十分に検討された概念ではない。そこで本項以降では、「生きづ

らさ」という言葉が「障害」に絡んで使われる場合が多いことと、「生きづらさ」と同様に「障害」を社会的な観点から捉え直す思潮があることを踏まえて、「障害」という概念について再考していく。

われわれが「障害」概念を掘り下げて考えるときに大きな示唆を与えてくれる論者の一人に、20世紀初頭に活躍した心理学者ヴィゴツキーがいる。彼はその著書の中で「障害」について興味深い論考を展開している(『ヴィゴツキー障害児発達論集』)。

(1) 「障害」は社会的環境の制約の下で発達的に形成される

はじめに少々長くなるが、その本の中から興味深い例えの記述を引用しよう。

「さて、実際に地震すなわち地下振動の結果、ある複雑な建物が崩壊するというのを考えてみよう。この場合、崩壊の過程自体は、この建物の論理と一般にまったく関係のない外的原因によって引き起こされたとはいえ、建物の崩壊はこの建物の法則に沿って、その内的論理に沿って進むだろう。まったく同じことが、人間の人格についてもいえる。精神分裂病が器質的原因によって引き起こされるとしても、人格や精神の崩壊がそれに見られる限り、この崩壊は心理学的法則によって研究されねばならない。なぜならば、その崩壊は実際にこの法則によって起こるからである。器質的過程が心理過程の発達または機能化の可能性を残している限り、それらは精神療法的、治療＝教育的影響や方向付けを必要とする。」(邦訳、p.239)

これは発達という観点なしに「障害」を捉えようとすることへの批判、個人における「疾患＝障害」図式の否定であると解釈できる(藤野、2003)。具体的な例で考えてみよう。たとえばろうの人の場合、耳が聞こえないことこそが「障害」であると捉えられがちである。だが実際はそうではない。ろう者が幼い頃から置かれている教育環境や生活環境を丁寧に追ってみるとそれは明らかである。

音というものを知らない先天性のろう者にとって、音声言語の存在を把握して理解すること自体

がまずきわめて不自然で難しいことであるという。しかし、それにも関わらず、長年にわたって世界の多くの地域におけるろう教育の優先課題は音声言語(あるいはそれに準ずる言語)の習得であった(たとえばニコラ・フィリベールのドキュメンタリー映画『音のない世界で』はその様子をリアルに伝えてくれる)。特に親がろう者でない場合は、家庭のコミュニケーション手段も音声言語であることが多い。そういう状況にあるろうの子どもは、常に自分にとってきわめて不自然である音声言語を使って人とやりとりすることを強いられている。言い換えれば、ろう者にとって自然な言語である手話言語を習得する機会やそれを存分に使う経験を大幅に制限されているのだ。

人間は他者と言語的にやりとりすることを通して複数の視点を含む談話的やりとりを内面化し、対話的思考プロセスを獲得していく(Vygotsky, 1934)。内言および対話的思考の獲得はわれわれが豊かな内面世界をもって人生を生きていくためにきわめて重要なことであり、その道具となるのが言語なのである(それは必ずしも音声言語である必要はない)。ところが言語としての手話を禁止された子どもは、他者と十全なやりとりをする道具、自らの内面世界を豊かにする道具を半ば取り上げられた状況で育つことになり、最悪の場合には知的発達が阻害されることすらあるという(Sacks, 1989)。

この例からも明らかなように、ろうという事実がすなわち障害であるわけではない。ろうという事実が特定のある状況に置かれたときに、他の精神機能の発達にも影響を及ぼし、それが「障害」につながるのである。

だが、それにもかかわらず「視覚障害」「聴覚障害」「染色体異常」「微細脳損傷」などの疾患カテゴリーはしばしば「障害」を説明する直接の原因として語られ、それらの「疾患」からどのようにして「障害」が形成されるのかというプロセスにはなかなか目が向けられない。その結果、当然の帰結として、「障害」の形成を押しとどめるための社会的環境や教育を創り出していく可能性も葬り

去られるのである。

ヴィゴツキーはこの問題を照射するために「一次的障害」「二次的障害」という概念を提起した。「聴覚障害」の例をとるならば、「一次的障害」とはすなわち「耳が聞こえないという状態」、「二次的障害」とは「他者とのコミュニケーションを欠いた状態」、「他者の視点を内面化した対話的思考が発達していない状態」である（上記の言葉を使えば、「一次的障害」は「疾患」に該当する）。言うまでもなくここで重要なのは、一次的障害が必ずしも二次的障害を引き起こすわけではないという事実である。さらには、さまざまな文化的活動に参加し自己を形成しながら社会生活を送るうえで障害となるのは常にこの二次的障害の方であるという事実にも注目しなければならない。これらの事実を踏まえた上で、一次的障害が二次的障害を引き起こす過程や条件は何かを研究し、そこに変革の手がかりを見つめることが求められる。つまりヴィゴツキーは、発達抜きで「障害」を理解することはできないことを示し、「障害」の形成過程こそが研究の対象であると主張したのである。

(2) 二次的障害のもう一つの側面：自己意識の形成において

一次的障害をもって「障害」と見なすことは適切ではなく、一次的障害から引き起こされた二次的障害を「障害」と捉えるべきであることは先に述べた。だが実は二次的障害の概念は、個人における心理システムの発達過程が社会的環境の制約下で何らかの制約を受けたときに形成されるものとどまらず、もう少し拡張して解釈できるように思われる。まず、先ほど取り上げたろう者の例で考えてみよう。

有名な事例として大西洋のヴィンヤード島の研究報告がある（Groce, 1985）。この島は、遺伝性の疾患のため人口に占める先天性のろう者の割合がきわめて高く、300年にわたってろうでない人も手話を通常の言語として実生活の場でもちいてきたそうである。この島をフィールドワークしたグロースによれば、島に住むろう者たちは社会生

活や職業生活に制限を受けた経験がなく、ろう者もそうでない人々もろう者のことを特別な特性をもつ集団と捉える様子は見られなかった。たとえば調査者がろう者を指し、島民に「あの人はろうか否か」と尋ねると、その島民はしばらく考え込んだ後で「そういえばろうだったかもしれない」と答えたという。つまり、この島ではろう者本人にとってもろうでない人々にとっても、ろうであるということは普段の生活の中で自覚する必要のない属性に過ぎなかったのである。

この事例で特に興味深いのは、ヴィンヤード島で暮らすろうの人々がろうでない人々と何も変わりがないという事実であろう。知的発達の中でも自己意識の中でも職業や結婚など生活上の機会の面でも、ろうの人とろうでない人を分けるものは何もない。ろうであるという事実は存在するが、それは例えばわれわれの世界における「扁平足」や「近眼」といった属性と大差ない扱いをされていると言ってよい。

では翻ってヴィンヤード島ではないわれわれの社会はどうか。ろうの人たちにとって自然な言語である手話が一般言語として認められておらず、ろうの人たちは自分たちにとって不自然で扱いづらい音声言語を習得することが是とされている。その理由としてしばしば示されるのは、「多数者である健聴者とコミュニケーションすることはろう者本人のためになるから」または「この社会の中で仕事を持ち生活していくためには音声言語が必要不可欠だから」である。つまり、音声言語の習得はろう者が社会に「適応」していくために努力して乗り越えるべき課題として位置づけられているのである。また仮にろう者が音声言語を最大限習得したとしても、ろうでない人たちの音声言語からすれば「不完全な音声言語を使う人々」の扱いを受けることになる。皮肉なことに、ろうの人々が努力に努力を重ねて音声言語を習得し、音声言語が主たるコミュニケーション手段となっている既存社会に参加していても、「ちょっと変わった」「不完全な」音声言語を扱う人々としてろう者は特別な存在として見られ、既存社会に参加して

いくために習得した音声言語が今度は「耳が聞こえない」ことを周囲に向けて表示し続けるのである。

ここでいくつかの疑問が浮かんでくるだろう。なぜ、ろう者だけが社会へ「適応」する努力を背負われなければならないのか。そして、そもそも「適応」していくべき先とされる社会は不変なのか、と。

ここでもう一つの興味深い事例として、フィクションではあるが H. G. ウェルズの小説『盲人国』を見てみよう。この物語は、ある一人の男性が見知らぬ国に迷い込むところから始まる。驚くべきことにその国の住人はみな目が見えない人であった。ただしその住人たちにとっては「目が見えない人」という表現は適切ではない。なぜなら何世代も前に器官としての目が退化した住人たちには、「目」「見る」という概念自体が既にほとんど意味をもたないものになっていたからである。

さて、迷い込んだ「目の見える」男にとってこの国は不自由極まりないものであった。家のつくりも街のつくりも（彼からすれば）とても奇妙で、（彼にとっては）とても不便で使いづらく、彼はおどおどしながら無力に失敗を繰り返すしかない。目という器官がないその国の住人は指や鼻や耳で環境を捉えるので、それらの器官で情報を探索しやすいように街がデザインされている。したがって、それまで情報収集と環境探索の大部分を視覚に頼って生活していた彼にとっては障碍だらけなのである（たとえば住人たちは光を必要としないから夜でも街や家に灯りはともらないし、標識や看板などの記号も視覚で捉える文字とは別の形態で表現されている）。

だがその無力な彼も徐々にその国での生活に慣れていき、ある娘と恋仲になる。地理的条件からこの国を脱出することが困難であると知った彼は、その娘と結婚してこの国で生きることを決心する。そして娘との結婚にあたって住人たちに自分の能力の高さを主張しようとして、彼は目が見えることがいかに優れているかを説明し始める。しかし、「目」や「見る」という概念自体がないこ

の国の住民には、彼の言っていることは荒唐無稽で意味不明なものにしか映らない。彼が目が見えることの正当性を訴えようとすればするほど、住人たちには彼が病的なおかしさを抱えた人に思えてきてしまう。そして住人たちはとうとうこの彼の異常さは「目」というおかしな器官が原因だと考えるようになり、彼の目をつぶそうとするのである。さてこうして彼は愛する娘と結婚するか自分の目をつぶすかという二者択一の状況に置かれたわけだが、結局娘と別れてこの国からの逃亡を決めたところで物語は幕を下ろすのである。

この物語の示唆するところは何であろうか。盲人国に迷い込んだ男は苦労の末にその社会に迎えられる手前まで行くが、男が住人たちと自分の間にある違い（「目」があり「見える」ということ）を主張し始めた途端に異質で危ない人間として扱われるようになった。男の前に提示された選択肢は二つ、すなわち「その“おかしな”特徴を捨てて“われわれの社会”に“適応”する」か、「“われわれの社会”を去る」であった。そこには「“おかしな”特徴を持ったまま“われわれの社会”の一員になる」という選択肢はない。この物語を読み進むにつれて読み手の多くは、盲人国での出来事がわれわれの社会で起こっていることの裏返しのように思えてくることだろう。

さて、このあたりで二次的障害の概念に戻ろう。社会の中で何かの属性や性質に特別の価値が付与され、それによって人間が仕分けされることがよくある。コミュニティの中の価値基準から外れた人たちは、「劣っているところ」を何らかの方法で補ってコミュニティに入っていく努力を強いられる。その圧力は善意から発しているものも多いだろう（現に盲人国の住人は男が狂っているから治療のために目をつぶしてあげようとした）。しかし、そのコミュニティのもつ価値基準はそのままにして個人に「適応」を迫るのは、盲人国の例からもわかるように非常に恐怖に満ちた権力的な行為である。また、「適応」を励まされて頑張っている人たちは、仮に「適応」がうまくいったとしても、その構造の中では自分が本来はアウトサイ

ダーであるという意識を背負い続けなければならないだろう。これは本来的なあるがままの自分が社会に（ひいては他者に）受け入れられていないという感覚を内包した自己意識を形成するだろう。こうした社会やコミュニティのシステムの中で生じる状況もまた、二次的障害の概念に含まれるものとして捉えなければならないのではないか。

4. 「支援」研究の出発に向けて：「障害」を再考する

ここまで「障害」という言葉をキーワードにして、そうした「困難」「問題」とされる事態は個人の中に何か固有のものが貼り付いているのではなく、他者を含む社会的環境の中で形成されるものであることを見てきた。上記で取り上げた事例は感覚器官の疾患に由来するものであったが、発達障害や精神障害についても同じことが言えるだろう。「障害」が他者や物理的環境を含む社会的システムの中で形成されるものだとすれば、「障害」は個人が所有している問題ではなく、同じ社会に生きる私たちの間で所有されるべき問題である。

障害のある子どもが就学免除や就学猶予の名の下で教育からも社会からも排除されていた時代に、重症心身障害児の教育実践を切り拓いた糸賀一雄（1968）は、障害をもつ子どもの教育や生活を考えていくにあたって「この子らに世の光を」という考え方は適当ではなく、「この子らを世の光に」という視座を持たなければならないのだと述べた。糸賀が「この子らに世の光を」を否定したのはその中に、自らは変わらないものとして在る社会からの憐憫のまなざしを見て取ったからであろう。糸賀のいう「この子らを世の光に」は、既存の社会から排除された子どもたちを社会に適応できない存在と見るのではなく、その子どもたちが十分に豊かに生を全うできない社会の方が闇であるとする考え方の表明だと解釈できる。それは決して障害をもつ子どもに対する特別視を示すものではない。「この子らを世の光に」には、ある特

定の人たちが排除される社会は、今のところ排除されずに済んでいる人にとっても生きやすい社会ではないという直観が通底しているように思われる。

重症心身障害児の教育実践をとおして「可逆操作の高次化における階層一段階理論」を構築した田中昌人（2006）は、障害者は障害をうけて「障害者」になっているだけでなく、生活や権利等が奪われることによって障害者にさせられているのだと述べた。これは社会のあり方によって「障害」の立ち現れ方が異なるゆえ、社会的な視点抜きには「障害」を捉えられないという指摘である。この考え方に立って、田中は発達研究者として「個人の系」「集団の系」「社会の系」の3つの系を同時に視野に入れ、それらの関係を明らかにしていかなければならないと主張した。

両氏の洞察は前項まで見てきたヴィゴツキーの「障害」概念と通じるところをもち、日本の1960年代、1970年代という時代状況の中で輝きを発している。では、それと時代を同じくして実証科学としての発展を遂げてきた心理学は、どのような視点を内に含んで「障害」を扱ってきたのだろうか。浜田（1984）は教育心理学や発達心理学には個体をその能力の観点からのみ見ようとする個体能力論が根を張っていると指摘し、個体能力論からは子どもの作り上げる生活世界の抽象的一部しか見ることができないと批判する。浜田によれば「能力」それ自体には意味がなく、その「能力」によって子どもがどういう世界を切り開くのか、すなわち子どもが物、人、自己の関わりの中でどのように生活世界を作り上げるのが重要であるのに、心理学は個体能力的視点到固執するあまり、それを見えなくしているという。ここで痛烈に批判されているのは、実証科学を名乗る心理学が関係的視点や力動的視点を看過してきた現状である。

また、石黒（1998）は個体の能力の向上や改善という視点から人間を捉える枠組みを「個体能力主義」と呼び、現状ではそれが心理学の基本的まなざしになっていると述べている。個体能力主義の下では、「個人が何かできる、あるいはできない

という能力は、個人に内在するものであり、個人が何か問題行動を起こすとすれば、それは問題を引き起こす何かを個人が持っているか、問題を生じさせなくする何かを個人が持っていないかということの意味する」。そして「問題」は個人に所属するものとして個人の行動として取り出され、その行為の歴史性、状況性は剥奪されるという。

ここに「支援」研究の課題と方向性を考えるにあたっての大きな示唆が含まれている。もしわれわれが自覚せずしてこの個体能力主義に立つならば、その「支援」研究はたいへん危ういものになるだろうと懸念される。なぜならば、たとえそれが善意や使命感によるものであれ、「問題」を個人に所属するものとしてその行動を取り出すという方法をとるならば、その「問題」を真に問い直す機会が失われ、そのうえ「問題」を持っている個人をラベリングすることにより「問題」を固定化する可能性がきわめて高くなるからである。

「障害」や「生きづらさ」という言葉で語られる「問題」は誰にとってどのような意味をもつものであるのか。そしてそれはどのように生成し変化するものなのか。それを問うことがおそらく「支援」を考えるにあたって決定的に重要であり、「支援」研究の出発点に置かれるべきであろう。子ども発達臨床研究センターの子ども支援部門はまだ船出したばかりであるが、保育的实践や教育的実践、あるいは社会的実践へのフィールド・リサーチをとおして、「問題」の歴史性と状況性を捉え（つまりは発達の視点から捉え）、「問題」のある個人の変化を促す支援という見方を超越した新たな「支援」観を模索していきたい。

文 献

土井隆義 2006 アノミー化する「個性」と親密圏の変容——若者の「生きづらさ」をめぐる、立命館産業社会論集, 128, 118-126, 146-149.
 フィリベール 1992 音のない世界で、(仏映画)
 藤野友紀 2003 ヴィゴツキー理論から見た発達保障。障害者問題研究, 31 (2), 49-55.
 Groce, N. E. 1985 Everyone Here Spoke Sign Language:

Hereditary Deafness on Martha's Vineyard. Harvard University Press. 佐野正信 (訳) 1991 みんなが手話で話した島。築地書館。
 浜田寿美男・山口俊郎 1984 子どもの生活世界の始まり。ミネルヴァ書房。
 細貝さやか 2004 金原ひとみインタビュー：生きづらさを形に。すばる, 26 (3), 92-95.
 石黒広昭 1998 心理学を実践から遠ざけるもの：個体能力主義の興隆と破綻。佐伯胖・佐藤学・宮崎清孝・石黒広昭 心理学と教育実践の間 第3章 (p 103-156) 東京大学出版会。
 糸賀一雄 1968 福祉の思想。日本放送出版協会。
 岩波書店 1997 特集〈生きにくさ〉という問題。世界, 632, 101-165。
 加藤博史 1981 街で患者として暮らすものの生きづらさ (主體的社会関係形成の障害と抑圧) と P. S. W. 機能。精神神経学雑誌, 83(2), 808-810。
 草柳千早 2004 「曖昧な生きづらさ」と社会：クレイム申し立ての社会学。世界思想社。
 京都ひきこもりと不登校の家族会 2006 どう関わる？思春期・青年期のアスペルガー障害：「生きにくさ」の理解と援助のために。かもがわ出版。
 松本学 2000 隠蔽された生きづらさ——「ふつう」と「ふつうでない」の間の容貌。看護学雑誌, 64 (5), 407-412。
 日本精神障害リハビリテーション学会 2001 特集精神障害の人々にとっての「生きにくさ」とは何か。精神障害とリハビリテーション, 6 (1), 4-37。
 信田さよ子 2001 子どもの生きづらさと親子関係：アダルト・チルドレンの視点から。大月書店。
 太田政男 2002 若者のなかの世界・世界のなかの若者：若者たちの生きづらさと希望。ふきのとう書房。
 Sacks, O. 1989 Seeing Voices: A Journey into the World of the Deaf. The University of California Press, Berkeley and Los Angeles. 佐野正信 (訳) 1996 手話の世界へ。晶文社。
 田中昌人 2006 復刻版講座発達保障への道①～③。全国障害者問題研究会出版部。
 田中康雄 2005 AD/HD 臨床から——生きにくさの検討。小児の精神と神経, 45 (4), 326-330。
 Vygotsky, L. S. 大井清吉・菅田洋一郎 (監訳) 1982 ヴィゴツキー障害児発達論集。ぶどう社。
 Vygotsky, L. S. 柴田義松 (訳) 2001 新訳版 思考と言語。新読書社。
 Wells, H. G. 橋本楨矩 (訳) 1991 盲人国。岩波書店。